

東近江市永源寺相谷町

# 相谷熊原遺跡

発掘調査現地説明会

平成22年(2010年)6月6日(日)

調査主体:滋賀県教育委員会

調査機関:財団法人滋賀県文化財保護協会

## 1. 相谷熊原遺跡の位置と調査の経緯

相谷熊原遺跡は、滋賀県東部の平野を流れる愛知川と、その支流である渋川の合流地点にあります。この場所は、愛知川が湖東平野に流れ込む先端部に当たり、山間地と平野部の接する場所になります。遺跡の背後には鈴鹿山脈へとつながる丘陵・山地が広がっており、眼下には琵琶湖と伊勢湾を結ぶ八風街道が通っています。

相谷熊原遺跡は、平成 21 年度に水田の区画を大きく作り替えるほ場整備工事が計画され、試掘調査を実施した結果、工事範囲のほぼ全域から縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されたことによって明らかとなった遺跡です。

平成 21 年 7 月から発掘調査を実施してきましたが、これまでに縄文時代早期～晩期の遺構・遺物を検出しています。特に縄文時代晩期の土器棺墓<sup>どきかんぼ</sup>については遺跡の南西端で集中して検出され、これまでに 29 基の土器棺墓が発見されました。

## 2. 発掘調査の成果

今回の調査では、ふたつの調査区から縄文時代草創期(約 13,000 年前、紀元前 11,000 年頃)の竪穴建物跡を計 5 棟検出しました。そのうち、最高所で検出された竪穴建物 1 では、埋土中から国内最古級の土偶が完全な形で出土しています。

今回発見された縄文時代草創期の遺構・遺物にはふたつの意義があります。ひとつは国内最古級の土偶が発見されたことにより、出現期の土偶のあり方を考えるうえで貴重な資料となること、もうひとつは、草創期の建物跡がこれまでの想像をはるかに超える規模であった、ということです。

これまで近畿地方での検出事例がほとんどなかった時期のものであるうえに、その残存状況が極めて良好であったことから、今後の縄文時代研究を深めるうえで貴重な資料を提供したと評価することが出来ます。

### ◎土偶の発見

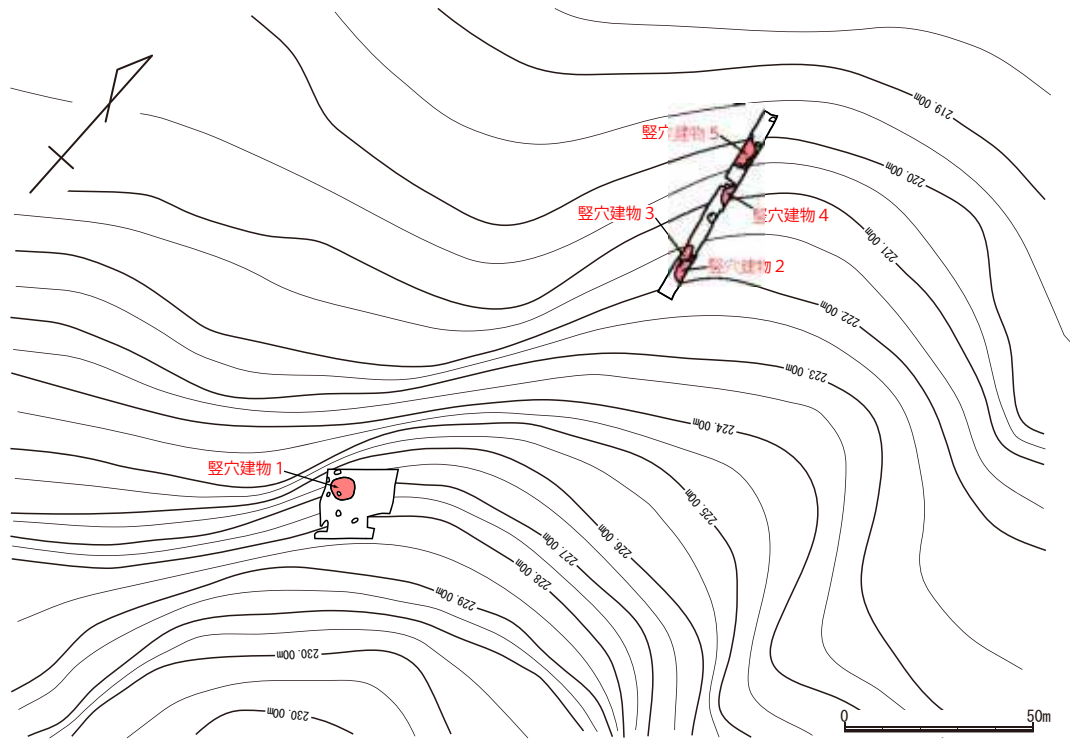
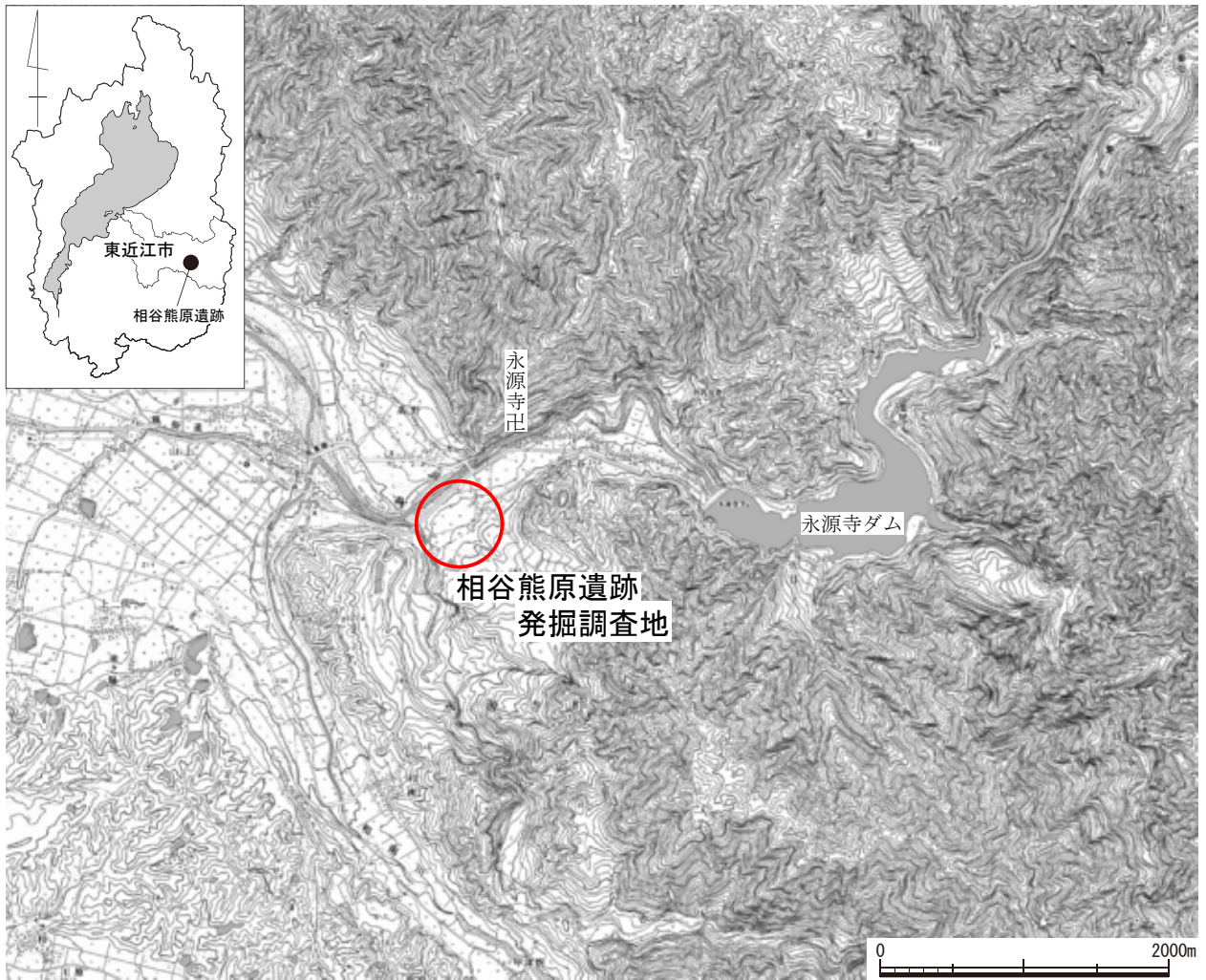
**土偶の出土した場所** 土偶は調査区中、最高所に位置する竪穴建物 1 から出土しました。

竪穴建物 1 は径約 8.0 m を測り、平面形は不整形円形を呈しています。深さは最も深い部分で約 0.7 m を測ります。

建物内部には、周囲に一段高くなったテラス状の高まりが巡っていました。柱穴の配列について規則性は見出せませんでした。テラスとの境に沿って並ぶような状況が確認されています。

**相谷土偶について** 土偶(以下「相谷土偶」と呼びます)は 1 点のみの出土です。高さ 3.1 cm・幅 2.7 cm・重さ 14.6 g を測り、乳房と腰部の括れが明瞭に表現されています。いっぽうで腕部・臀部(おしり)・脚部は最初から表現されていません。また、腰部以下を平らに仕上げていることから自立が可能です。頂部には小さな突起があり、穿孔が施されています。孔の深さは約 2 cm を測ります。

相谷土偶の時期については、同じ竪穴建物 1 から出土した土器や石器等が判断材料となり、縄文時代草創期後半(約 13,000 年前、紀元前 11,000 年)のものと考えられます。同時期の土偶には三重県<sup>かゆみいじり</sup>粥見井尻遺跡出土の土偶 2 点(以下「粥見井尻土偶」と表記)があり、縄文時代草創期後半の土偶としては 2 遺跡・3 事例目となります。



縄文時代草創期の竪穴建物位置図



正面から



背面から



側面から



左斜めから

竪穴建物 1 出土 土偶

**優美な肉体表現** 今回出土した相谷土偶は、女性のトルソー(人間の頭・腕・脚を除いた胴体部分の造形物)のバランスの良さ、また丁寧に製作されている、という点で粥見井尻土偶よりも芸術的な優美さに秀でています。

造形的には豊満な胴体像を表現していますが、頭部・腕部・腰から下の臀部・脚部の表現は省略されています。体部は厚みがあり、比較的横方向に長く、やや寸詰まりの形状を呈します。これは、逆三角形に近い形状の粥見井尻土偶や、薄くて縦方向に長い茨城県花輪台貝塚等から出土した土偶(早期前葉、以下「花輪台土偶」と表記)とは異なるものであり、大阪府神並遺跡出土土偶(早期前葉、以下「神並土偶」と表記)に近い形状といえます。

**自立する土偶** 相谷土偶の底部は平坦に仕上げられていることから、自立することができます。このように自立する土偶は、縄文時代中期以降のものには通例的にみられますが、これまでに出土している他の草創期・早期の土偶にはみられない特徴です。

**相谷土偶の評価** 土偶とは縄文時代草創期に出現し、縄文時代を通じて作られた土製品です。現時点では粥見井尻土偶が最古のものとされています。

続く縄文時代早期(約 11,000 年前、紀元前 9,000 年頃)になると、近畿地方周辺で土偶の出土例が認められるようになり、三重県大鼻遺跡(以下「大鼻土偶」と表記)・大阪府神並遺跡で土偶が確認されています。いっぽう、関東地方でも茨城県花輪台貝塚等からの出土例があります。

これまで国内最古例とされている粥見井尻土偶は、大きさ・形状とも相谷土偶との共通点はほとんど見つかりません。また、大鼻土偶は、粥見井尻土偶と型式学的につながるものと考えられていますが、今回出土した相谷土偶は鈴鹿山脈を挟んでいるとはいえ、これらとの共通性は見出せません。

## ◎ 竪穴建物跡について

調査地は発掘調査で確認した限りでは、緩傾斜の尾根が愛知川に向かって延びていたようで、竪穴建物跡群はこの尾根の西側谷斜面に沿って造られており、今回の調査で5棟確認しました。

規模がわかる建物については、径約 8.0 m の不整形の平面プランで、検出面からの深さは約 0.6 ~ 1.0 m を測ります。5棟のうち3棟については、建物掘り込み内にテラス状の平坦面を有していました。建物床面には多数の小穴を確認していますが、柱並び等は明確ではありません。

なお、炉跡等の燃焼施設は、いずれの建物内からも検出できませんでした。屋外炉の使用も考えられますが、明確な炉跡等の痕跡を確認することはできませんでした。

## ◎ 出土遺物について

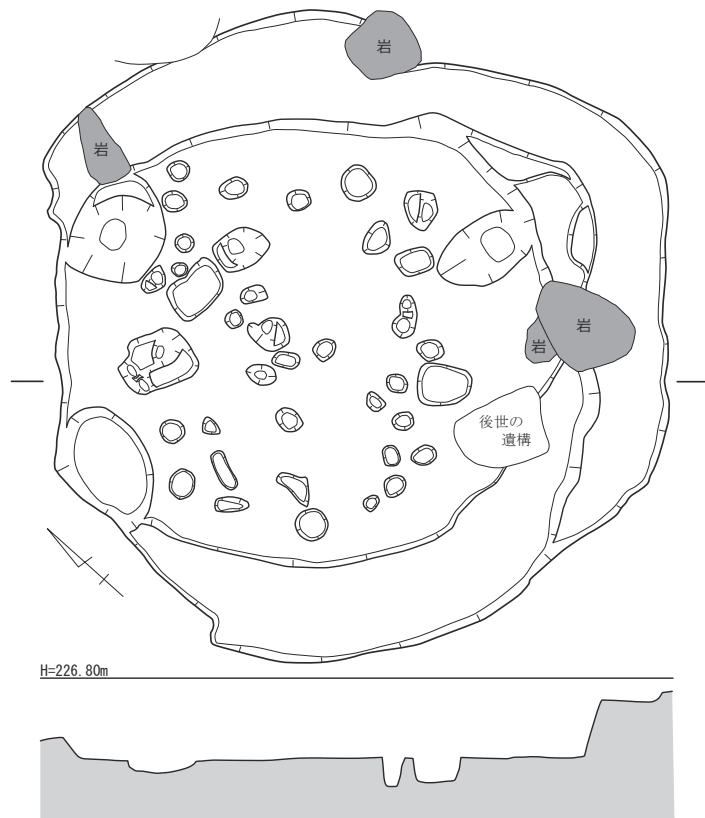
各竪穴建物跡からは、土器・石器・土製品(土偶)が出土しています。

### 土 器

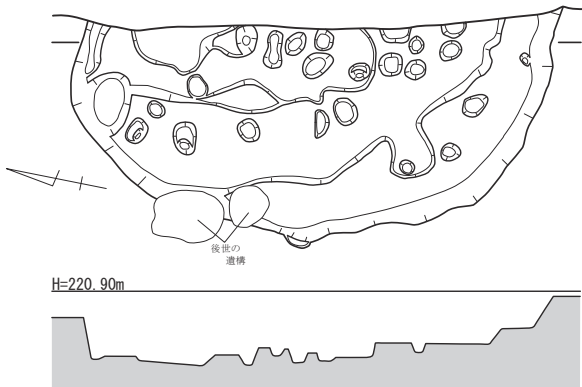
**爪形文土器と無文土器** 出土土器の種類としては爪形文土器と無文土器を確認しています。爪形文土器は施文が浅いことから、工具ではなく人の爪で施文されたものと考えられます。数量的には文様を施さない無文土器が多数を占めますが、これらは爪形文土器に伴うものと考えられます。

**押型文土器が混じらない** 出土した土器は無文のものが大半を占めることから時期比定が困難

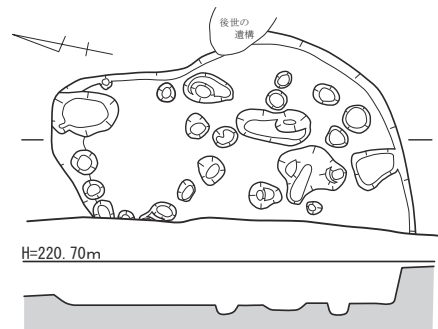
竖穴建物 1



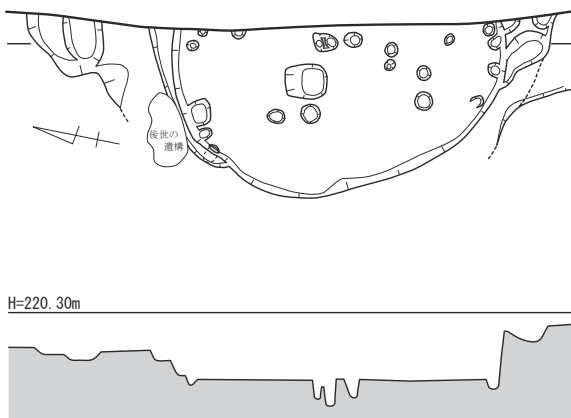
竖穴建物 2



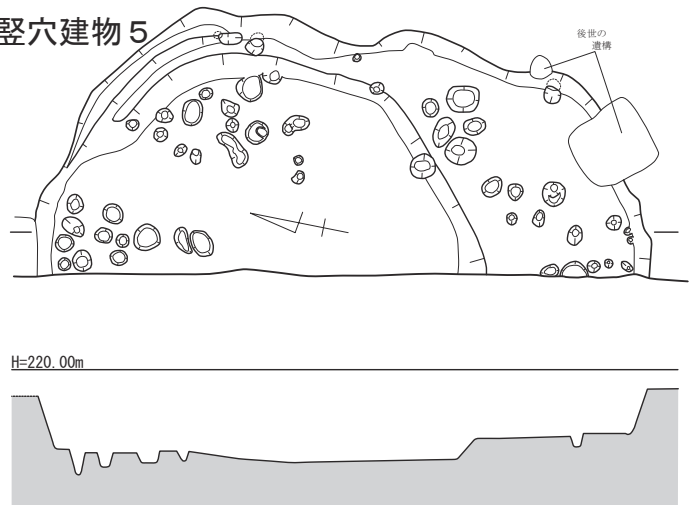
竖穴建物 3



竖穴建物 4



竖穴建物 5



竖穴建物 1～5 平面図・断面図

でしたが、数量的には少ないとはいえ爪形文土器が混じること、さらに押型文土器がどの建物跡からも出土していないことが特徴として挙げられます。

押型文土器は縄文時代早期の始まりの指標とされているもので、この土器がどの建物跡からも全く出土せず、爪形文土器・無文土器と共伴しないということは、竪穴建物跡が早期が始まる前には埋まってしまったことを示す証左となるといえます。

なお、竪穴建物 1・4・5 から出土した土器について、土器に付着した炭化物を放射性炭素年代測定法(AMS法)で測定したところ(各遺構 3 点ずつ測定)、すべての土器について、約 13,000 年前頃(紀元前 11,000 年頃)という測定数値が出ています。

## 石器

石鏃<sup>せきぞく</sup>・有茎尖頭器<sup>ゆうけいせんとうき</sup>・刃器<sup>じんき</sup>等の剥片石器<sup>はくへん</sup>と、有溝砥石(矢柄研磨器)<sup>ゆうこうといし</sup>・敲石<sup>やがらけんまき</sup>・凹石<sup>たたきいし</sup>・台石<sup>くぼみいし</sup>・石皿<sup>れき</sup>等の礫石器<sup>れき</sup>が出土しています。石器を作る際に出るカス(剥片)も数多く出土しています。

石材は、石鏃・剥片はチャート・下呂石が多数を占めますが、サヌカイト製の剥片石器(石鏃・搔器<sup>そうき</sup>)も確認しています。また、礫石器は、砂岩系・花崗岩系の石材で作られています。

ここではおもな石器類について説明します。

**有溝砥石(矢柄研磨器)** 有溝砥石(矢柄研磨器)は全ての建物跡から出土しています。いわゆる矢柄研磨器といわれているものも含まれますが、典型的な形状としての矢柄研磨器は竪穴建物 5 から出土したもののみです。

有溝砥石はいずれも砂岩系の石材で作られており、いずれも被熱しています。筋目は 1 個体に付き 1 個とは限らず、複数の筋目を持つものもあります。

**石鏃等の狩猟具** 石鏃は各竪穴建物跡から出土しています。石材はチャート・下呂石が大半を占められます。大半が小型で基部<sup>きぶ</sup>に挟り<sup>えぐ</sup>を入れるもの(凹基無茎鏃<sup>おうきむけいぞく</sup>)です。なかには基部の挟りが極度に深く、両端が長い脚となるような長脚鏃<sup>ちようきやく</sup>も出土しています。

有茎尖頭器と想定される破片は竪穴建物 2 で出土しています。石材はチャートで、先端部のみ残存していました。

**搔器(スクレーパー)** 竪穴建物 3 と竪穴建物 5 から出土しています。特に竪穴建物 3 で出土したものはサヌカイト製の大型品です。これらは狩猟具ではなく搔き削る機能を持ったと考えられています。

**刃器・楔形石器など** 今回の調査では多量の剥片が出土していますが、これらをよく観察すると、部分的に刃部を作り出しているものが確認できることから、ここでは刃器として一括します。チャート・下呂石・頁岩等を石材としています。

楔形石器は原石を割る際に使われるものです。物にあてがってハンマー(敲石)で敲いていたようで、ハンマー(敲石)による加撃と対象物からの反作用による衝撃から、両端に剥離痕を生じているものです。

**石皿・台石・敲石・凹石など** 礫石器のうち、台石・敲石には石器製作時の使用痕が認められます。また、今回竪穴建物跡から出土した石器のうち、石鏃・剥片が埋土の上から下まで多く出土していることを併せて考えると、建物の周囲で石器を製作していた可能性も十分考えられます。石皿については磨った痕跡が残存しており、これらについては堅果類等の植物性食物を磨りつぶしていた可能性が考えられます。

### 3. まとめ ～縄文時代草創期の相谷熊原遺跡～

今回、相谷熊原遺跡で見つかった縄文時代草創期の竪穴建物跡群は、近畿地方で初めて見つかった草創期の集落跡として評価することが出来ます。鈴鹿山脈を隔てた三重県では、粥見井尻遺跡で縄文時代草創期の竪穴建物跡が4棟検出されていますが、相谷熊原遺跡では建物間に未調査部分があり、さらに同時期の建物跡が存在する可能性もあります。

粥見井尻遺跡では建物の重複があり、一時期には1棟ないし2棟の建物から構成されていたと考えられています。相谷熊原遺跡で見つかった5棟の建物跡が、同時並存か時期差があるかは今後の検討が必要ですが、草創期の長い時間幅のなかで、これら竪穴建物が密集していることが注目すべきことであり、この遺跡の特徴だといえます。

竪穴建物そのものについては、大きさ・形状・深さ、いずれも明確であり、竪穴構造が確立していることがわかった点は大きな成果です。私たちが漠然と抱いている縄文人のイメージを覆す、これまで知られていた以上に高い文化レベルを有していたと考えられます。

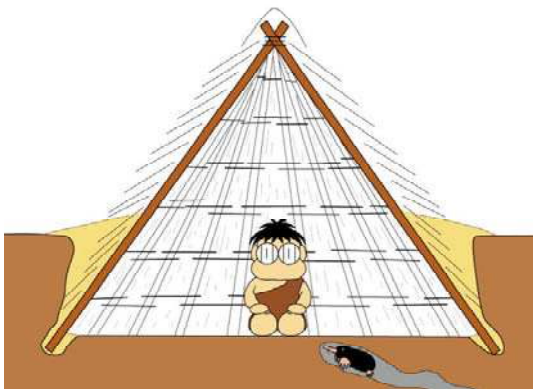
また、予想をはるかに上回る深さ(約1m)だった点も見逃せません。大きくて深いということは竪穴建物の掘削に多大な労力を要したということが想起されます。多大な労力を投入して造られた竪穴建物の利用方法として、一時的な居住用ではなく一定期間定住していた可能性も考えられます。いっぽうで、この地点は花崗岩地帯であり、地面が花崗岩の風化土がベースである点から崩壊しやすいという点、琵琶湖側は周囲の山から吹き下ろす強風があるという点、などが影響しているのかもしれない、風土や環境への適応ということも視野に入れ、その評価については慎重に扱うべきと考えます。

縄文時代草創期とは、旧石器時代と縄文時代をつなぐ時代の転換期ともいえる時期です。この頃は、地球規模で起こった大きな気候変動である最終氷期が終わり、暖かとなりつつある頃です。

気候の変化により大形哺乳類はいなくなり、シカやイノシシ等の中形の哺乳類が増えてきました。森は針葉樹から広葉樹林へと変化し、それに伴い食糧事情も変化していきました。

このような環境の変化に伴い、人々は生活の仕方を変えざるをなくなりました。そして、土器の発明やいろいろな形の構造の住居等が生まれ、約10,000年間続く縄文時代が始まります。

相谷熊原遺跡から出土した土偶は、地球規模の環境変化という激動の時代を生きた人々の精神文化を考えるうえで貴重な資料であり、また、縄文時代全般に亘り作られ続ける土偶という「第2の道具」のルーツを考えるうえで、今後欠くことの出来ない重要な発見例となります。



縄文時代草創期頃の竪穴建物(想定復元図)

※『三重県埋蔵文化財調査報告 大鼻遺跡』の復元図をトレース・加筆





竪穴建物 1 (北東から)



竪穴建物 2・3・4・5 (北西から)

調査の実施にあたり、  
地元の皆様より  
多大なるご協力を  
たまわりました。  
厚く感謝申し上げます。

／財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をととして  
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会  
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages